別紙様式３

上越教育大学研究プロジェクト　終了報告書（若手研究）

研究代表者　所属・職名　　附属小学校・教諭
氏　　名　　湯澤　卓
研究期間　平成２９年度

研究プロジェクトの名称	身体表現活動で育む音楽科における「資質・能力」 ～ダンスを中核として～
研究プロジェクトの概要	＜研究の特色と意義＞ これまで音楽科においては身体表現と音楽教育の関係性についてたびたび議論がなされ、多方面で研究・議論が行われてきた。これからの社会を生きる子どもにとって、身体表現、特にダンスにかかわる学習は、音楽の基礎的な能力というだけでなく、音楽的な素養、様々な文化との共通項としてのノンバーバルコミュニケーションの手段の一つなど、その価値は大きいと考え、本研究では、身体表現、特にダンスを中心とした授業を展開することにより、子どもにどのような「資質・能力」的成長が見られたのかを明らかにする。加えて、ダンスを教育活動に取り入れることによって生まれる価値、意義などについて考察を行う。
研究成果の概要	１　主体性の伸長 Ａ児（４年生・女児）は、ダンスサークルのメンバーだった。学校内では友だちを誘って好きなアーティストのダンスを真似たり、オリジナルのダンスをつくったりした。休み時間や朝活動が始まる前の時間なども、教室で音楽をかけて踊っていた。すると、同じ学級の友だちが次第に集まり、同じようにダンスに取り組み始めたのである。Ａ児は、友だちの数が増えたことをきっかけとして、複数人数で踊るダンスに挑戦し始めた。その延長から、２月に開催された校内のダンス発表会に出場し、評価を受けた。 ２　場をつくり出す能動性 Ｂ児とＣ児（共に６年生・女児）は、ダンサーの「まなこ」に憧れていた。研究代表者は、その姿や思いを知り、「まなこ」を学校に招聘し直接ダンス指導を受ける機会を設けた。その経験がＢ児とＣ児の意欲を高め、３月には「ファイナルライブ」と称して全８曲のダンス発表会を自ら企画し、成功させた。こういった姿は、自らの思いを実現する能動性が育まれたことによるものだと考える。
研究成果の発表状況	・ＮＳＴ「みんなのニュース」ＪＣＶ「ニュースＬｉｎｋ」で、取組について紹介（共に 7/19 放送） ・平成３０年６月に行われる「第７回共創型対話学習研究所研修会」において、「『感性』をはたらかせながら『人・もの・こと』にかかわる子ども実際」として発表予定。
学校現場や授業への研究成果の還元について	・上越教育大学附属小学校２０１８年研究会にて参会者に研究の概要とそれに伴う子どもの実際を紹介予定。